

「中国近現代の知識経験と文学」の特集にあたって

中国の伝統的な文学理論が探求してきたのは、文学の「本質論」「功用論」「情性論」「文体論」「風格論」などであつたが、文学を研究可能なひとつの対象として「知識論」の観点から論じるようになったのは、清末に新式学堂が設立され、文学が学科のひとつとされて以後のことである。清末以降、学問の「知識化」「客観化」の傾向は、文学を含むあらゆる人文学へと徐々に押し寄せ、時とともに人文学と科学とを二分する構造は著しく脅かされることになる。その具体的事例の最たるものが、まさしく一九二〇年代の「科学と玄学論争」である。

一九二三年、その論争をまとめた論集『科学と人生観』の序文が胡適によって執筆されたが、彼は十項目をあげて「新人生観」の輪郭を提示した。それには次のようなものが含まれる。天文学・物理学および地質学・古生物学の知識に基づき、時間と空間の無限性を知ること。生物学・生理学・心理学・人種学に基づき、「人」は「動物」の一種にすぎないことを知ること。人類学・社会学に基づき、社

会・歴史の進化や道徳の変遷を知ることによって、迷信や「礼教」（封建社会の礼儀道徳）から脱却すること。これらはもはや「新人生観」にとどまらず、ほぼ「新人文観」ということができるだろう。「人間性」「精神」「情志」「道徳」「天道」「宗教信仰」などといった、ほぼすべての固有の概念は、全面的にリセットし、一から論述しなおすことを余儀なくされた。さらに、五四時期の著名な知識人たちはみな、往々にして科学の教育を受けたことがあり、胡適、魯迅、郭沫若、周作人などは、作品の中でたびたび進化論や相対性理論への関心を示している。彼らの文学創作にとつて、科学ないし様々な知識との関わり合いは不可避であり、結果としてその言語表現も必然的に新世紀の知識経験と融け合うこととなった。

ここで知識「経験」というのは、もちろん各種の資料から構成される「知識」を認識・理解することのみならず、それらの知識に感化された後に現れる心理状態をも指す。この感化とは、様々な感覚、情緒、識別、比較、想像や価

値判断を含んでいる。したがって、「経験」の構造には、
学び知ったことのほかに、それに対する自身の態度や意
志、価値の取捨選択をも含んでいる。「人文科学」におけ
る「経験」を考えようとするならば、ただ単に推論的方法
や実験結果、もしくは分析的言語によって、その議論の客
観性あるいは必然性を力説するのではなく、知性と感性を
結びつけた様々な経験を描出もしくは解釈した上で、その
中における様々な自己の可能性を提示するものでなくては
ならない。これはとりもなおさず、五四以来のいわゆる
「科学」に対する一面的で狭隘な先入観を突破し、人文
「知識論」の領域を広げること、文学研究がいかにして
「知識」経験にアプローチするのか、そのための新しい
道筋を提示することにつながるだろう。

本特集は、近代の知識体系が各形式の文学表現にどのよ
うに融け込んだのかを探索するものである。とりわけ重要
なのは、各種文体に対する観察である。翻訳小説・新詩・
清末の白話小説・民間の韻文体といった様々な文体形式の
上からは、海外の知識が伝播し導入され、国内の知識が再
統合を経て新たに出現する、その軌跡がどのように観察で
きるのか。これらの近代経験や言語形式を弁証的に記述す
ることは、いかにして可能となるのか。中国近現代文学が
「知識」経験に与えた変化や、それを対象とした表出
は、どのように意義づけられるのか。さらに、知識経験に

対する中国文学特有の表現のひとつと考えられるのが、当
代中国における「作家の大学駐在制度」と文学批評および
創作との間に横たわる関係である。これらの観察を通し、
知識体系と文学表現の間の新しい地平を描き出すこと、そ
れが本特集の期待するところである。
(鄭毓瑜・黄英哲)